

序^{*1}鈴木 淳 一^{*2}

日本医学教育学会が編集した「医学教育白書」第6冊目をお贈りする。第1冊1972年、第2冊1978年、以来4年ごとに刊行され、第6冊は1994年版である。

1994年までの4年間の出来事の最大のものは、1991年(平成3年)、大学の自由を大きく認めた文部省の大学設置基準の大綱化である。これは、わが国の大学全体に一大変化をもたらす重大な変革といえる。これはまた、同年4月の医師法を改正せずに、4条件下での学生の医行為の拡大を認めた厚生省見解とともに、わが国の大学医学部・医科大学の卒前教育にきわめて大きな変化をもたらしつつあるのである。すなわち、医学部卒前教育の6年一貫教育への転換、大学独自の教育目標設定、新しいカリキュラムの開発、そのための自己点検、自己評価の実施などが、それぞれの大学で精力的に行われている。このような“自主的変革”は未だかつてなかったともいえるし、上記制度の変化は、大へん大きなインパクトをすべての医科大学に与えたといえることができる。

卒後臨床教育は、1968年(昭和43年)のインターン制度の廃止以来、少しずつ修正が行われ今日にいたっているが、1990年(平成2年)、1994年(平成6年)の医療関係者審議会臨床研修部会からの意見書などによって、卒後臨床研修必修化への提案がなされ、1995年を迎えた。卒後臨床研修の必修化は、医師法にも関係しかねない大きな変革であり、また、わが国の医療に直接関連して多くの議論を呼ぶものと予想される。国民にとっても大事な卒業直後の臨床教育が、提案や議論が実り、良い方向に向くよう心より願い期待している。

日本医学教育学会は、1994年、創立満25周年を迎えた。期を一にして牛場大蔵会長が勇退されたのも学会にとって大きな転換であった。本学会の経過については、牛場前会長、中川米造前副会長そのほかの方々の執筆をご覧いただきたい。1994年には、編集委員会も尾島昭次(委員長)、畑尾正彦(副委員長)のコンビによって運営されることとなった。この白書上梓を機に、25年間の編集を総まとめして、特集その他資料のすべてを示したのでご覧いただきたいと思う。25年間の時代の変化もその中によく伺い見ることができる。

本学会が後援し、学会自身への大きな支えとなってきた富士教育研修所における医学教育者のためのワークショップも、1993年に第20回を迎えた。これは、今日までに700名以上もの人材を育成蓄積したことから、医学教育の今後にとっては大へんに大きな力になるはずである。富士研における年1回のワークショップは、幾つかの大学に波及し、それぞれ学内での教育ワークショップが開かれてきた。前記医科大学の変革を望ましい方向へ導くために有用との認識から、学内ワークショップがますます盛んになりつつあるようである。次の医学教育白書では、それらのワークショップ、そして医学部変革の成果についての記事が大きく報じられるものと期待している。

今回の医学教育白書は、事情があつて、約半年遅れての刊行となったが、その方面の識者を著者に得て、資料も豊富に盛込まれており、日本医学教育学会の4半世紀のまとめを試みた執筆も含めて、参考文献としてご利用いただけたと思う。

著者の方々、担当運営委員の斎藤宣彦氏のご努力、そして篠原出版のご協力により、300頁をこえる立派な白書を世に送ることができた。まことに同慶にたえない。

*1 Preface.

キーワード:

*2 Jun-Ichi SUZUKI 帝京大学医学部耳鼻咽喉科学、
日本医学教育学会会長